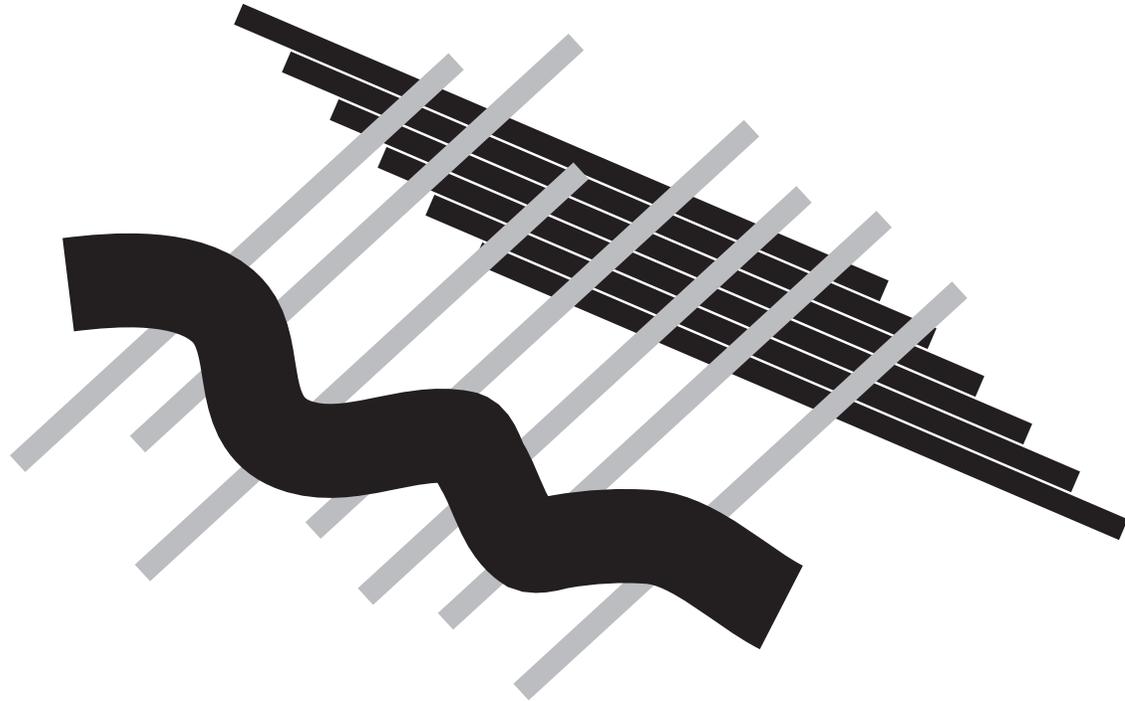

月 刊

MéLange

VOL.93



2014.07.27

詩と評論

月刊

「MéLange」VOL.93

2014/07/27

月刊「MéLange」編集部

◆スピリチャル発四十八手発言

DOBINSKI as ILL-JUSTICE

スピリチャル発四十八手発言 イルフライト着地は現実
 オリジナル 文字になる 鉛筆 濃さは6B 書き方は旋律
 走る振り幅 普通から宇宙 苦痛頭痛もぶっ飛ぶ 夢中ミュージック
 FOR THE DAYS 相乗効果で無益な争いは今日まで
 YOU & YOU I&I 型にはまらずに前に前に
 天然素材大切にHIGHに 有限無限へ重ねるRHYMIN'
 魂の会話の一瞬の記録 携えハイパーゾーンLYRICK&FLOW
 畜生反転表裏一体を体感 POSITIVE THINKの階段
 ※
 ハタから見りゃ滑稽 時計の針逆回転する様な光景
 メビウスの輪から抜け出す コンコード WHAT?! 冒険toda正面
 敵 味方の見方は第三者の目線と第三の眼
 STRAIGHT NO CHASER 現在地はここ極東 ロングアイランド YEAH
 神戸 関西 近畿 日本 世界 KEEP ON STAYIN HIGH に確固な核
 陸海空360°自由にリリック書く 上に腕磨く
 夢喰う猫はすなわち悪魔 人間稼業で打ち勝つ明日は
 昨日より より確実に TO DA BACKBONE 光が差すわ
 ※
 FLY TO DA MOONLIGHT ハイトーンも奇抜に出す DAVE`Sやばい音響
 IT`S DA CLASSIC BASE TASTEはJAZZY DJ.SHIRO GIVE ME SCRATCH
 スムースに最短距離で頂点へ 繰り返す波の音源で
 コンプリートされたMISSION その後CHILLしてトークにも花が咲くわ
 刀隠さんと歩いとるなら もろ刃の剣も 大人のくぐりの
 腰ぎんちゃく モチ 銀閣寺 モチ 金閣寺 狙う インパク知
 両刀使い 左右で相当上手い 夢もそう遠くない
 UNSIGHED HIGH LIFE FLY TO DA SUNSHINE
 ※

※BRING IT ON BRING IT ON MY VIBES
 BRING IT ON BRING IT ON MY RHYMES
 BRING IT ON BRING IT ON MY LIFE
 BRING IT BRING IT YES YES YO`ALL

「月刊めらんじゅ93号目次

詩 & 川柳 & ラップ

スピリチャル発四十八手発言	DOBINSKI as ILL-JUSTICE	03
でもきみは	富 哲世	04
知子さんへ	川田あひる	05
紙片拾遺	大西隆志	06
膨張空行	大西隆志	07
久しぶりに紙魚を見た／放浪するポテトチップス	中嶋康雄	08
ニガナの花をさして	にしもとめぐみ	09
愛咬	岩脇リーベル豊美	09
船霊さん	福田知子	10
川柳連作 なんて素敵に形勢逆転	情野千里	11
気土女飯管脱魚文	千田草介	11
わたしの住む町	御着かおり	12
煙草を吸わない人間がふとそのことを考えだす(連想ゲーム7)	野口裕	13
水脈	寺岡良信	16
そこはかたなく空に	中堂けいこ	16
未読	上野 都	17
武の夢 (ヒ和尚のミミック)	高谷和幸	18
ひとびと	大橋愛由等	19

エッセイ

<詩人通りより>15 「懐想 屋根裏部屋」	岩脇リーベル豊美	14
連載第4回／HANAだより <よい子は見ない、映画『私の男』>	中堂けいこ	15
<神戸詞あしび>82 「クリステヴァと間テキスト論」	大橋愛由等	20

編集部だより★14／第93回「Melange」読書会の話者は、木澤豊さん。宮沢賢治の作品世界を語ってもらいます。今回はジョバンニとカンパネラにしぼるとのこと。／7月14日(月)に姫路で行われた「カフェ・エクリ」において、クリステヴァとテキスト論を話しました。ずっと気になっていた哲学者なのですが、この際テキスト論に限ってまとめておこうと思うようになり、語らせてもらったのです。／同20日(日)には、兵庫県現代詩協会の第四回読書会において、藤井貞和氏の作品世界について一時間ほど語り、会員のみなさんからの質疑応答にいただきました。二週続きの語りで、多くの文献を読み考えるキッカケを与えられたのです。これからも、スピノザなどわたしのお気に入りの哲学者や表現者のことについて語っていきたくと思っています。(大橋記)

◆でもきみは

富 哲世

でもきみは
そんなに無理しないでもいいと思う
たとえどうにもならない
成り行きに思えたとしても
あしたか
感度のわるいスマホみたいに思われたとしても
目の前の
きみの橋は長いのだ
昼がみじめなほどにスクランブル交差点を叩く
去年の夏は
何を見たくなくて
何を欲しがって街をぶらついていたのか
猫と海と
東の間のおしゃべりと休息
ぼくらは逃げ込んだ大丸の
しびれる冷気に負けて
化粧品や輸入雑貨売り場の芳香の迷路をこごえながらくぐり抜け
夢の世界を追放された主人公みたいに（誰に読みとかれることもなく）
逃げ場の見つけられない変幻する炎熱の海へ舞い戻っていた
ぼくらは何を求めていたのか
ときに信号をはみ出ようとすると
途方に暮れるその立ち方は
いまだって変わらない
いつだってハ泣ける人間なのだ
鼻歌まじりの時がきみを編みなおして

◆知子さんへ

川田あひる

吸いこまれそうになりながら
列車をやりすごし
とびちる肉片のみじめな結末を
罪のかなしみを
放心することで救われた
女とソフトクリームが雨に濡れていた
黒いスーツで濡れていた
だれにも事情がありだからこそ引き返せた
商店街は煌々として
震えるくちびるをポケットにかくして
よくも帰れた
子らは遠く
隣人を失い
量感も感慨もなく
ワンルームのかたすみで鶴を折り
ぬり絵して
浮かんでいたけれど
今日生きた
食べられた
薬の効用で
淋しい
実感した。
人は

ことばの無言の銃口が
ぼくを違う物語の人として欺こうとしているのだ
今年の盛夏は
きみはどんな抜き手をきって
泳ぎ抜けるのだろうか
ひとのまばらな映画館で
約束のホドロフスキーのつづきを観て
冷たい水をごくごく飲んで
市民広場のビヤガーデンで
テール越しに日射しのなかの雑沓の街路をぼんやり眺めたりして
視線をすこし落として
メゲたって平気なタバコをふかし（もし美しく言おうとすれば）
まぼろしを射る金の弓矢を
胸いっぱいひきしぼって――
光る雲をたずさえ
首にあふれる汗をくすぐる夕風の気配に救われながら
記憶を湛えた緑の波紋を揺らめかせ
自分のためだけではない見えない息吹き
のぼり坂を家路につく
たとえ心に大きななくしものをして
夜には夜の太陽が燃えている
それがきみの我が家だから
一度ぎりの惑星だから
出来上がったばかりのハリポタの館には今年は遊びにいけそうもないけど
またの夏にはわわさんや雪ちゃんたちといっしょにたずねたいね
いろんなふうに分を言う
わかっている不可能を道連れにして
だからどんなにくるしくたって
きみのよろこびの道は長い

苦しみ
喘ぎ

出会ってゆくのだろうか
世間から脱落していた私になぜ声をかけてくださったのだろう
なぜ覚えていてくださったのだろう
知子さんが
地図と日時と
会いたいです 送ってきてくださった
あの聡明で美しく眩い知子さんはかけはなれたひとだけど
発熱の園児が投げ出す身ひとつで
鈴の鳴るドアを押し
やあ、いらつしゃい
スペイン料理店カルメンは
遠い山の向こうの見知らぬあたにかさがともっていて
別次元に
頬があかるんだ
精進のテーブルを
知子さんがさしだしてくださいました
口腔違和に耐えてきた私の舌に
カルピスの残滓を感じた
創作の
幸福の時はすでに去っていたけれど
書いてみようか
生きようか
希望というのか
人生は
書きこまれていないと
おしえてくださった
知子さん

◆紙片拾遺

大西隆志

いつものようにからだをかかめて
水の流れを手本に
親指と人差し指で紙をひらい
生活雑貨をはらう
はらいながらひろう
ひろいながら手からこぼれていくものがある
すうじをポケットに
名前はノートにはさみこむ
たちどまるとあたりは静かになる
請求書をひろい
ベンチにすわり夕日をつまむ
ことばはゆつくりと沈んでいく
紙コップは影をのぼし
ロープは何度も踏まれてのびきつている
財布は場所をかえて転がっているのか
鍵は音をたてないで帰路を指し示す
紙はやぶれない
書かれた記号はみらいへと棄てられ
段ボール箱のなかから飛び出す
手と足と蚯蚓、スピーカーはくたびれている
食器をひらい
はしをかぞえ

◆膨張空行

大西隆志

ふくらんでくる
空気を入れすぎたわけではない
くうきよなる気持ちのためなのか
むなしさに囚われているとセンセイはいうのだ
からだのなかにひろがる沼に足をつけているからかしら
湖だった記憶があるのに曖昧なりんかくしか描いてくれない
夕日を浴びたきせつもあつたようだが
手にしている小さなパンがふくれ
かばんのなかの履歴書がふくれ始めるのだ
彼女もふくれ
皺などは消えていく
さすつていると
おもちのように気持ちがいい
ヨクボウの泡が次から次に吐き出されてはいるが
噴水のように美しい
約束の橋の上で

黙ったまま
いのりのしせいをたもつ
ひろえないでいるのは
あしたの自転車とあさつての鍵
よろしく、よろしく習得
紙片は崩れた字で
打ちだされたきょうつうの絵を飾る
はやくしなさい
おそいとひらわれてしまう
くらしはのぞかれ
ローカル線の踏切の音が遠くから届いてくる
豚はひろい
玉ねぎにこうかんし
ピーマンはすてる
すててきたのは日月なのか
吸殻をひらつて火、つけたのは
ぼろぼろでばさばさの紙のヒトだったのか
糠味噌壺一つない
百円マックに詰まる暮らしのカタチ
つまさきで
ことばはころがされる
ばらばらの
ことばはつなぎあわされないで
欠損をかかえて
だれかにひろわれる
ビニール袋の中の
にちじょうにつつまれた
虹の喩が
かみきれをかがやかす

遠望すると安全の街並みが
ポップコーンの思想を抱えながらふくらんでいる
高度資本主義がブリーフケースのなかをおだてあげ
うるわしきセンセイはじぼくする
木をかねて、お香の香りをくゆらせるのだ
わたしたちはすこしづつふくらんでいく
家に帰れば、テレビジョンがふくれ
だんだんと大きくなり部屋中をのみこんでいく
借金がふくれ
貧乏なぼくらがふくれ、レジスタンスに修正が加えられていくよう
らんぼー少年が西瓜を通りに置いていく
靴がふくれる
いしくれは破裂するか
みじかい時間に
針金の輪を首に巻かれているのだつたが
いまは、指先のエロチックに
ぼくらはさらされているようだ
ふくらんだ爆弾に
まどわされて
息をもらす、空気ではないが
もれていくものに
ときどき声がまじっている

◆久しぶりに紙魚を見た

中嶋康雄

紙魚はムクムクと大きくなり
大きくなるほど希薄になり
全体になつた
常時耳鳴りがするようになった
皿は割れ続け
食パンは踊り続けた
激しい雨が降り続き
庭の柔らかい植物が
茶色いカメムシのアジトになつて
狂つていた
かゆい
耳朶が尖つたカメムシに吸われて
枯れかけていた
久しぶりに
テレビを見た
テレビは退屈な光合成をしていた
糸ミミズのコロニーが
テレビを見続ける食パンに乗つかつて
忙しく身をくねらせていた
泡が空中に漂つていた
マイマイ蛾が大量発生した
蛾の鱗粉で真っ白になつた
毒を含んだ
弱い毒なのでなにも変わらなかつた
紙魚がビニール製になつて
ぼくを包み込んだ
ぼくはなにもかもを受け入れた
ぼくもビニール製になつた

◆ニガナの花をさして

にしもとめぐみ

灯りの紐をひつぱるように
迎えはやつては来る
どこかへ行くようで どこへもいかない
懐かしい家に帰るようなあたたかきがある
知らない人に出会うような
見知つた人と出会うような
行きつけない場所なのに
生まれ落ちた時からその方へ歩いてきた
かもめが舞い降りたり舞い上がったり
海の音がする
今、足跡が続いている
海へ 海へ
詩集のページには砂がこぼれているだろう
砂粒を数え終わる頃
忘れ物をしたように
ふいにへあなたは☒ちえてしまうのです

◆放浪するポテトチップス

中嶋康雄

雨がしとしと降る夕闇
傘をさして橋を歩くと
どこからともなく
ポテトチップスが寄つてきて
雨宿りする
湿つたお芋語が痛々しい
体操服を忘れた夢が
今も這い寄る
運動場を這う蟻よりも
弱い漸進
濡れそぼつたポテトチップスを
嘗めてやると
どこからともなく
無数の仲間のポテトチップスがやつてきて
傘を吸う暗闇が
アスファルトから立ち上がる
傘が溶ける
ポテトチップスと歩く
いつもの道が揺らめき
電柱が芋の花を咲かす
ポテトチップスが地中を這う
這い出す
放浪する
飢えた幼児が後を追う
ポテトチップスを囙る音がする
親は音だけを連れて帰る
家でポテトチップスを囙る音だけがする

◆愛咬

岩脇リーベル豊美

僕を舐めるきみを僕自身として見つめていた
分身でも身代わりでもなく
僕自身として見つめていた きみを
きみは女性のかたちの水面をもち
祈るすがたを湛えている
傷つけられた空の彼方
幻と天のあいだに実を結ぶ舌が
遠い孤島の激戦地を懐想させる
祈りのことばが終わらぬうちに
きみの漕げる声が届くからもう
僕がそこから消えてしまつても
僕のようにそのひとに首を摺り寄せて
舐めてあげて

向こう岸で歌われている唱歌を
くちずきみながら
そのひとはきつと来るだろう
きみは僕の蹙音と見紛えて
そのひとに最大の愛情を寄せるだろう
だけど 僕を舐めるきみには
ひとつの小石として顕現する樂園を
きみの水面下に沈めてほしい

◆ 船霊さん

福田知子

南九州の離れ島を旅したとき
漁師さんのボートに乗って沖にでたことがある
島のお婆さんのシノさんがボートに乗る作法を教えてください
ボートに乗る作法？
私はそんなものがあるのかと不思議に思ったが
シノさんは大まじめだった

乗るときにはなあ 船霊さんにちゃんと頼まなあかんよ

神さまかな？ 船霊さん

こまい舟やけどちゃんとおるからな つて

シノさん 言ってた

小さな舟だから祭壇もないだろうし

神様とか 鳥居とか キツネや犬 うさぎとかの絵が書いてあるのかな？

ほれはのお 知らんよ 誰も

知ったらあかんよ 誰も

シノさんは呟く

けど 舟のどつかに必ず入れてある

小さな木彫りの仏さまや あるいはお札のようなもの？

いんや いんや シノさんは首を横に振った

童女の髪の毛やったり 櫛やったり 歯やったり

いろいろや… な

シノさんは小舟に向かって掌をあわせた

私もシノさんに倣って掌をあわせた

◆ 川柳連作

なんて素敵に形勢逆転

情野千里

日替わり定食をたのむオスマントルコ軍

朝令暮改店長 ユニクロの朝三暮四

はやく親指を隠せオランダに半旗

痒いところにミサイル私の上半期

夕顔嬢の陥落ブルキナファソ和讃

老いらくの前転後転火がぼうぼう

ズッキーニ壇上へトマトが両脇侍

下半身霞んで来て万年青の花満開

◆ 気土女飯管脱魚文

千田草介

水田飛行研究所が運営する尼僧破門相談
窓口で猫売りたちが商品を虐待しながら
ミトコンドリアDNAに母屋を乗っ取ら
れたことについて国際司法裁判所がどの
ような油槽船を沈めるべしと回答するか
は今年のエルニーニョ現象とヤンキース
の成績如何によるのではないかと記され
た十八世紀英国のコーヒーハウスから発
せられた瓶詰め祭文を照らし読みするベ
リーダンサーの足の裏の匂いに海底トン
ネルを吹き抜ける風を感じて総毛だった
中山寺の仁王像はベリング海で水葬に
されるかもしれないという恐怖から逃れ
るべく子ども見守り隊に志願して川西小
学校の通学路の安全を守る空挺訓練を受
けようと普天間基地に向かう途中でハシ
ブトガラスとウシガエルが命のやりとり
をめぐるって問答するようすを目撃して無
常を悟り路上駐車車のポルシェ911を強
奪して乱数表に行く先をまかせる。

◆わたしの住む町

御着かおり

サーカス小屋は
いつまでも建築中です

キリンが鳴いたり

鯨の笛が聞こえますが

姿はだれも見ただことはないとい
ただ

ヒンドゥー教の寺院から逃げ出してきた猿達がうるさいだけだ

ほんとうは大地に育つはずなのですけれど

市営住宅の共同の庭でも立派な花を咲かせる蘇鉄は夏がすぎです

鉢植えの徳利椰子は新しい病気になって

警察署の向かいにある

噴水の公園には五本の藤がささえる棚があります

そのねじれた窪みには

苔で飾られた

蟬の脱け殻が溶けていつているのです

空気は蒸され喉が詰まるほど

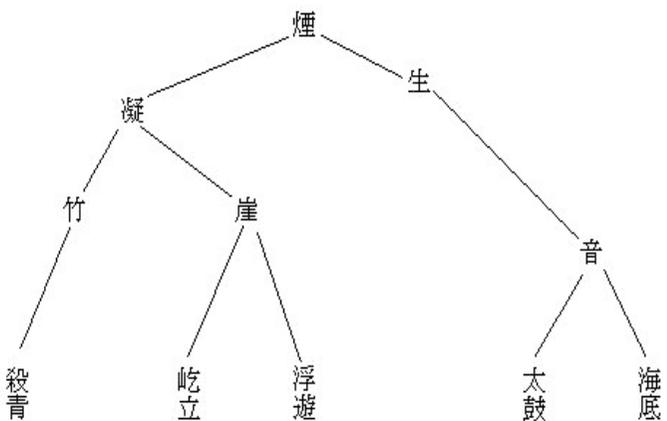
「まるで夢のようなんだ」

デジタル信号の天使は開放されるのでしょうか*

* 『天人頌』 富哲世 / 1989より

◆煙草を吸わない人間がふとそのことを考えだす(連想ゲーム7)

野口裕



車窓から幾多の言葉が生まれたことか

あかん書けんわ とつぷやきつつも

薄雲透かす陽を眺めて

車輪状骨格の非在に思いが至り

二足歩行に奇異の念を抱く

ひび割れた松の皮が

ときに走り根の瘤となれば

吉凶いずれにせよ

枕抱きに寝ころびたくなる

▼懐想 Königsbergerstr.32の屋根裏部屋」と空
空をよく見上げるほうだと思ふ。詩人通りの自宅からも電車の窓からも、何とはなしによく見上げるほうだと思ふ。このことに拘りを持つていないわけではないが、もともと携帯電話は必要最小限、それも相変わらずのガラケー(とは、ガラパゴス化もしていない)で言えないのかも知れない。里帰りをして、空港で借りたりチップを新規購入したりするのがなんとなく億劫というだけで、帰国時は実家の固定電話や公衆電話が連絡網となり、メールも機会があれば時々どくどくが、完璧に近くアナログ化している。見方によっては、このやり方のほうがよほど面倒とも思え、先方に迷惑をかけるものの、数分を争う事項ならともかく、ことは足りている。先日、スノーデン氏によるNSA情報収集に関する暴露、首相メルケルの携帯電話の盗聴などを踏まえて、重要文書

詩人通りより/13

懐想 屋根裏部屋

岩脇リーベル豊美

をカシヤカシヤと音を立ててタイプライターで打つということが今再び復活しているという記事を読んだ。昨年はかなりの売り上げだったが、タイプライター製作所のほとんどが店じまいをしてしまったらしい。懐かしくなり、渡独時に購入し、一時子供のおもちゃにもなったものの、まだ十分機能するタイプライターを取り出して来て、勿体ないなと思った。ここ数年、当地でも通勤電車でも路上でも圧倒的にスマートフォンを操る人が多くなって、勿体ないなと思う、カシヤカシヤという人が音も聞こえず、天気や行き先を空から読み解くこともない。

毎月のように、詩人通りからの話はあちこちに跳んでしまいが、ここで漸くケーニヒスベルグ通りの屋根裏部屋が登場する。ケーニヒスベルグは哲学者カントが一步も外に出なかつたという東プロイセンの町、現ロシア領カリーニングラードのことであるが、カントではなく詩人通りの筆者が、ヴェルツブルグの最初の六年弱を暮らした屋根裏部屋のある哲学者通りがその名を負っているのである。よく空を見上げるのは、その屋根裏部屋のためかと思う。

その建物は、第二次世界大戦後、この町の復興に寄与した建設業者W・クラフトが、学生に屋根裏を提供しようとして造作したと、のちに知った。階下は普通のアパートで、日本式というところの四階、つまり4th floorが屋根裏だった。階段を昇りきると、その左半分が物干し空間で、右半分が五部屋に区切られ、共同トイレとシャワーが奥にあった。当時の家賃は光熱費抜きでひと月120ドイツマルクだったと記憶している。現今のワンルームマンション的な学生寮からはほど遠く、遠藤周作のフラス留学時の屋根裏部屋を思った。古くて狭くて設備もなく、部屋には水のみ出る洗面台があり、小型冷蔵庫と簡易ベットと洋服ダンスと一組の机と椅子が家具として置かれていた。壁紙の模様も覚えていた。ドイツ人が見れば、50年代だというだろう。それでも、路面電車の停留所も近く、半年後には電話も引いたし、私以外はアパートの住人も屋根裏の住人も気さくで親切なドイツ人

で、季節の行事に誘ってくれたり、洗濯機の使い方から電話の引き方まで教えてくれたり世話になり、思わず長居をしてしまった感がある。そして何より、道一本隔てたところにメイン川が流れ、その河川敷が憩いの草地になつていて、斜めの天井を押し上げて開ける形式のガラス窓からは、川向こうの丘に立つマリエンベルグ要塞がライトアップされて見えることも、長居の要因だつたと思う。夏には河川敷に仰向けで本を読んだり、エアメールを書いたり、昼寝をしたりした。部屋では、ちょうど簡易ベット上から窓をのぞくと空しか見えなかつたから、空を見上げることになつたのかもしれない。信じられない災いが続く今だから言うが、空は面白い。いつ書いたか、詩ともいえないような詩が出てきた。

▼「Königsbergerstr.32の屋根裏部屋」

トランクひとつ引き摺って1cmづつ出掛け何万cmも旅してきたような錯覚のぼりつめるとあの屋根裏部屋にはすべてがあつた
トイレもシャワーも挨拶も共同空間にして自称コスモ

よい子は見ない、映画『私の男』

なぜかいつまでも残っている。さまざまな映像やインモラルなすじ道などがぼんやりと焦点をむすばず、何なのかよくわからない。映画で語られなかつたその「何か」が気になり、原作の桜庭一樹「私の男」を読んでみた。直木賞作品である。いくつかの人間関係が異なつていて、各章は登場人物のモノローグでつづられる形式で、全体を見わたすことができるのは読者のほうにある。

映画を観てから原作をよむというのは、映像が先に固定化されるということだ。本をよむ行間の喩がつねに映像のほうにさまざまわりしている。そしてこの小説はなおのこと注釈にすらなつておらず、私のわだかまりは残り続ける。

モスクワ映画祭グランプリ受賞の直後で、うかつにもレディステイにあつた私は前から二列目、顎をあげた姿勢のまま流水の海や津波のむごたらしいようす、くどいラブシーンや血の雨を、脳天からあびるように見てしまった。これはいけない、とおもいつつも身じろぎもせず見入らされたのだつた。けつして気持ちのよい映画ではない。だがこうして今も不可解さがのどにひつかかつているのはなぜだろう。

十七歳しかちがわぬ父と娘の話。奥尻島の震災で孤児となつた少女を海上保安官の男が引き取る。遠縁ということだが実の親子の暗示がある。そして親子にかかわる二つの殺人事件を中心に十五年の年月をめぐつて話がまわる。

ちまたでは父と娘の近親相姦の倫理が話題になつたが、少女からの男への愛情は父性愛より異性愛にちかいたころがあつて私にも納得できるのだが(同意はしません)、男のほうの性愛の質がわからない。浅

H A N A 便 り 05

野忠信演じる淳悟はすらりとした体軀のモテ男だ。すでに恋人もいてほかに浮名を流している。安定した職業と容姿にもかかわらず、浅野がみせる切れ長の細い瞳は暗く得たいの知れない翳りをおびている。恋人の小町は小説のなかでは淳悟への果たせない恋愛関係のもつれに苦しみな安と猜疑心にとりつかれていく。小説ではこの章だけがとりわけ現実味をおびて引き立っていたように共感できた。つまり小町だけがまつとうな心の持ち主なのだ。

男は少女が実の娘であることを自覚している。父は実感をこめて料理をつくり学校にかよわせPTAに参加し弁当をもたせ初潮の手当てもしてやる。実にきめこまやかな世話ぶりなのだが、そこに少女をじぶんの恋人とおなじような感情、つまり異性へのエロスが芽生えるのが理解できない。少女のほうではごつちやになつていっているのはわかるが、一線をこえたとき男は転落の予感にとりつかれる。ある朝高校の制服姿の娘に欲情してしつこいほどの性交シーンを展開するのだが、からみあう二人に赤い雨がふりそそぐのだ。二人のなめらかな肩や背中が真っ赤に染まる。髪の毛が血潮にからみ合うようだ。インモラルで繋がつてしまった男女のこれからの道行き、殺人や逃避行を予言する血の雨だろうか。熊切監督はこの場面だけ空想イメージ(非現実)をいれた。とついでいやらしい場面を赤の完全な色彩、明白な赤で染め上げる。圧倒的な力の赤色は観る側の私たちをも共犯者にとりこんでゆく。

浅野は逃亡の果てのだらしない生活でも端正な雰囲気もくずさない。娘役の二階堂ふみは流水の海からはい上がつたときの不気味な微笑みを、最後まで不気味なままたちつづけた。償いはきつとこの二人の先に待ちうけるのだろう。

中堂けいこ

◆水脈

寺岡良信

暁はささやいた
星冷えの野のとほくに
ひとすぢの泉をとどけるように
羊歯の化石のほひが
未生から湧きでる声を
甘くしたたらせる水脈
デネブ アルタイル ベガ
空の高みと地層の深みに
恩寵と恩寵が響きあひ
タマリンドの翳を立ち去る母たちよ
やさしく息づける水のなげきは
あなたが命をつないできた
永劫のうつしみ
わたしは命じよう
けふ花をかざす人の
澄んだ愁ひにも
燃える七月を汲む
壺を添へよと

◆そこはかたなく空に

中堂けいこ

そこはかたなく空に昇りつづける麒麟の首はさきほどから盛んに松葉を喰んでいる、
もうじき喰いつくすのだ、五寸釘みたいなのを東にして舌を振じらせ黄色い首をゆらして、
バックミラーで見えてしまふ、わたしは車を南へ走らせる、どんどん走らせる、丘をこえ谷をこえ、南はこっちだ、あっちだ、バックミラーに光がはいる、
朝のまだ暗いうちに母とわたしは松の根方で落ち合った、母は袂から半紙の包んだのをとりだし松の根の太ももほどのほりだしたあたりに広げて、
わたしたちは両腕をいっばいにのぼし大木を囲い込むように右に三回左に三回、ゆつくりとミイさんにことわりをのべミイさんにおい出てもらうようおゆるしねがうよう、
わたしたちは白い形代をささげて柏手をうつ、
母は紙バックの酒を丸い根にかけまわし、包みの中の塩を手のひらで温めながら山に盛る、
そんな一度きりの朝を迎えて、
枝が落とされてから輪切りにして上から順にクレーンで下ろしている、
南への道は海で終わるがバックミラーには麒麟の首がある、
ずつとある、

◆未読

上野都

万年雪の残る雪渓を
斜めによぎる無数の灰色の足型は
5月の青空をめくり返して
ばらばらと空から降ってきたか
もう 届かない
いえ
たとえば富士山の頂にも
届けるものは届く
と いうから
まだは無 い はず

ここでも
繋がるものは
踏まれ
砕け
いつのまにか貌がない
登りつづけて忽然と消えた

老いた山人は
万年雪にエッジを立て
やわな怨念にしがみつく指を
一本ずつ切り落とし
深い谷へ降りてしまった

窓辺に灯
映す影は茫々と闇を包み
抱いたものが
なお かたち成ろうとして
刹那ばかりが
言葉を探す

これは書くのではない
読むのだ
あれは読んだのではない
書いたのだ
逡巡する

血の跡を追う言葉
巡り来て
いまだ
残影が視つづける谷の深さから届くもの。
やっぱり 痛くない

◆ 貳の夢（ヒ和尚のミニミック）

高谷和幸

明るくなる庭に、雨が澄むのでこもっていたら隣座敷の時計の音(カーン)にもちこたえられなくなつて「今のぼくは種の中いるぼくと同じものだ」いつの間にか座布団(マジック・サークル)のうちに落ちた。(唇を横一文字にかみしめて)そこに千日を失っていたというぼく(フィロです)は腕を組んだ一匹の動物を標準にすることに決めていた。座布団の下に隠し切れない自傷のあとがあるとすれば、朱鞘の短刀のような、なんと太ももだったのだが、そのひとつは葉っぱの階段を虫に食われてしまつてさぐつてみてもみあたらず、東のあたりがにちゃにちゃするばかり。自然界の庭と同程度の確実さで、数年のあいだに顛顛(こめかみ)を忘れつつあった君(デメア君です)に理の当然というものを期待してしまつた。残つたもので、牡蠣殻、の、苦惱の、窯(よう)にがんばつてみなよ。「世界は他の世界によつて時かれた種」だから。ぼく(フィロです)は昔の君(デメア君です)のぼくで、ぼくらは溶けた魚だつたから。けしからん。(奥座敷で筆にたつぷりと墨をつけ、誤謬、耄碌、無辜、飢餓、氾濫、豊沃と文字を「書」にしていたヒ和尚の声がする)刻限はせまつているのにまだ「サトラレ」ないのか。それは、ぼくはココロで、君はワレという自然物で、一つのもので二分されたせいだという。「無だ、無だ(むだだむだだ)」線香を一本立たて、それが消えるまでに電気羊の夢(おお、あれはブラジルの火焰樹)を「サトラレ」という。蹴球頭のヒ和尚め、「何だ丸行燈の癖に」いつかは蹴つて、け、けむ、で、も、刻限が迫っている。発熱している。失くしたこめかみ、ひきつる記号が熱い。「世界は他の世界によつて時かれた種だ」なんだこの修辭の要請は、みんなレプリカントじゃないか。ゆらゆら揺れる。これじゃぼくは庭の影法師(イドラ)だ。いつそのこと先生の首を取つてしまおうか。猶予はない。座布団(誰が書いた十七文字?)から出られないならあつさりと死んでしまおう。そのまえに、仰向けに見上げると天井に生物のような電気雲。カーン、時計が二度目の音をたてた。

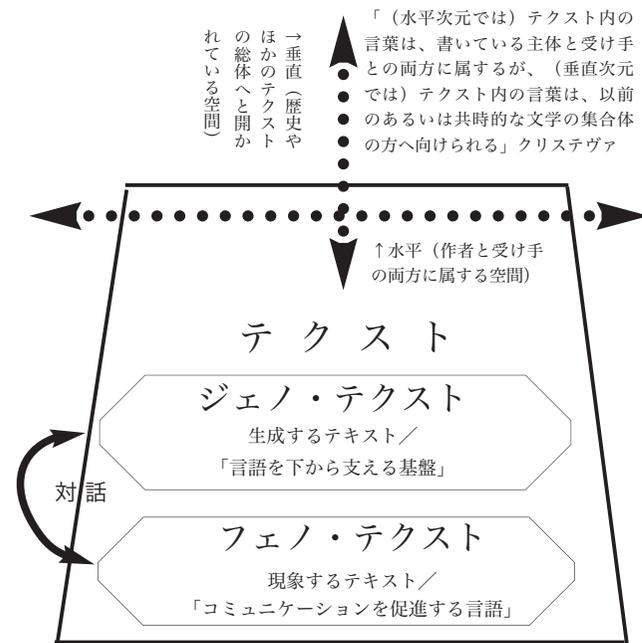
◆ ひとびと

大橋愛由等

三色ともすべてNONとしか表示されない信号機ばかりあるその街にぽっかりあいた大きな孔がありその街に棲むひとびとは一日に一回はその孔を覗きにきて(だれがその孔の深さを正確に測りこの孔に墮ちたまま帰つてこなかった人の数をだれが覚えているのかまたはこの孔にひとびとが棄てた悲哭を誰がどうやって回収するのだろうか)との問いを無言のままに反復するのだが何年たつてもその問いに答えるひとはいなくその孔はぽっかりあいたままであるのをひとびとはどこか安堵して

その孔に近い川にはときどきふわふわした塊がいくつも上流から流れてくることをひとびとは知らないふりをしながらいつ流れ出てくるのか分かつていてそのふわふわを眺めるためのベンチをひとつふたつ置いて
(あれは海まで流れつくまで毀されるだろうとかあそこは海にまで行って海流に乗つて何年後かにはこの川に戻ってくるだろうから楽しみだ)などと言ひ合ひながらお揃いの手拭いを男も女も肩にかけていて

その街を貫通する細長くどこにでもつながっている緑地帯があつてそこを通過してあまたの客人がこの街にやってくるのだが時を重ねるにつれてその孔が見えなくなつてしまひ通り過ぎるだけの者がほとんどのなかで時折孔に立ち寄りただただ孔を眺めていたりぐるぐるの周りだけ果てにダンスをしたりするその様相をひとびとは声をかけることなく軽い微笑で迎えながら(ほらまた悲哭がやってきたとかあのひとにはベンチに座つてもらおう)と目配せするのである



クリステヴァの間テ クスト論は有効か？

ジュリア・クリステヴァ(一九四一-)はずっと気になっていた哲学者であった。

七月一日(月)姫路で開催された詩の教室「カフェ・エクリ」でクリステヴァのテキスト論をかたるキツカケが与えられ、この機にこの思索者と向き合うことができた。

クリステヴァがテキスト論をあらたに展開したのが一九六〇〜七〇年代。今からするともう半世紀ほど前の理論ということになるが、ことテキスト論については、いまだ「間テキスト論」の有効性が少なからぬ識者から言説化されている。テキスト論のおさらいをしようと思ってしまうとそれだけで誌面が足りてしまうのではしおることになるが、ロー

ン・バルト(構造主義)によって示されたテキスト解釈はそれまで作者の自立性によって支えていたものを一気に「作者の死」「読者の登場」「書かれたものは織物のように多次元空間としてとらえる」と定立することでそれまでのテキスト解釈を一変させてしまった。

クリステヴァは、さらにテキストの「静動的な」構造主義テキスト理解に対して、「意味生成」の過程を重視している。主体としての構造(テキスト)が、「生産物(サンボリック)」なるものより「生産性(セミオティック)」に注目することになる。つまりテキストをつねに「意味生成」の現場としてとらえているのである(「ジェノ・テキスト」と「フェノ・テキスト」の対話)。つまり「在るもの」に対して「在ること」と決定せずに、今あるものは「意味生成」の過程にすぎなく、つねに「在るもの」は生成しつづけるのだということを強調しているのだとわたしは理解している。

「間テキスト論」でいえば、さらには、ひとつのテキストだけで完結するのみならず、つねに他のテキストにさらされ影響しあっていることを強調する。つまりテキストは「カオナシ」だと唱える人がいる。宮崎駿監督映画「千と千尋」に登場するあのカオナシである。もともとの自己主体はなく、飲み込んだ他者が自己そのものになることから、発想されたものである。

クリステヴァは構造主体よりコードが優先されるともいうが、構造というすでに先験的に「在るもの」があり、それを理論の前提にすること自体、七〇年代以降の主体解体の思想・文学の経緯からすると、果たして「間テキスト論」は今の時代に有効なのかという議論はある。ネット時代に突入した21世紀に生きて我々にとって、ネット上に展開されている情報と向き合うには、「ハイパーテキスト論」の方が身近に感じられる言説かもしれないのだ。この意味からもクリステヴァのテキスト論が今において再設定が可能かどうか検証をつづけていきたい。

詩と評論

月刊『Mélange』VOL.93
めらんじゅ

2014年07月27日 通巻93号
発行所/月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人/大橋愛由等(『Melange』同人)
Mobile 090-5069-1840
maroad66454@gmail.com
定価 500円(税込)